

緒言

近年、所得の増加による生活水準の向上や労働時間の短縮による余暇時間の増大、あるいは、価値観の多様化などに伴って、多様な観光活動への欲求が増大しつつあり、これまでの観光地域は、増大する多様な観光活動に対応して複合的な観光活動を保証することが強く求められている。このような課題に答えるためには、観光地域のこれまでの開発動向を的確に把握し、現状の観光開発ポテンシャルを評価することが必要不可欠となるが、観光開発ポテンシャルを総合的に評価するといった研究事例は乏しいのが現状である。

本研究では、大阪大都市圏内に位置し、複合的な観光地域としての発展が大いに期待されている淡路島を対象に、観光資源の分布パターンと観光動態との関連および観光客の利用実態の調査を通じて、淡路島における観光特性を把握するとともに淡路島の観光開発ポテンシャルを総合的に評価する手法の開発を試み、観光開発ポテンシャルから見た今後の観光開発の課題と方向性を探究することを目的とした。

なお、本研究は4章から構成し、各章ごとの要旨を以下に述べる。

第1章 研究の背景および目的

本章では、欧米、日本および淡路島での観光の歴史的展開と観光を扱った既往研究の整理を通じて、本研究の位置づけと目的を明確にし、研究目的に整合した研究方法を明確にした。

淡路島は、大阪大都市圏内に位置し、古事記の「おのころ島」の伝説で知られてきた由緒ある観光地域で、淡路島観光の原点は神社参りと鳴門のうずしお観潮である。第2次大戦後の動向を見ると、昭和30年代～昭和40年代にかけて交通機関の高速化とフェリーポートの開設に伴って淡路島へのアクセス性が大幅に進展し、関西で有数の規模をもつ健康型観光としての海水浴場が整備され、海岸沿いには宿泊施設も活発に整備された。昭和50年代～昭和60年代にかけて、観光が大衆化するとともに観光に対する指向は「見る観光」から「する観光」へと転換し、行楽型観光や教育型観光の開発整備が重視されるようになった。昭和60年代以降も淡路島に対する複合的な観光地域としての発展が大いに期待されており、この増大しつつある多様な観光活動に対応した今後の淡路島での観光開発のあり方を探ることが急務である。

このような課題に答えるためには、観光地域としての淡路島のこれまでの開発動向を的確に把握し現状の観光開発ポテンシャルを評価することが必要不可欠となる。これらの課題に関連する既往研究としては、観光開発の動向と現状の観光ポテンシャルとの関係の定量的評価に係わる研究、観光地域の評価特性から捉えた観光資源の立地条件と利用パターンとの関係分析、観光動向から捉えた観光地域の開発整備に係わる研究、大都市近郊部における観光地域の構造と観光動態の解明などの成果が得られている。しかし観光動向に関して総合的にアプローチし、今後の観光開発のあり方を探るための観光開発ポテンシャルを総合的に評価した研究例がほとんど見られない現状にある。

従って本研究では、以上の観光の歴史的展開と既往研究の整理を通じて、観光の基本形態を観賞型、健康型、教育型、行楽型の4タイプとして捉え、淡路島の1市10町を解析単位とした観光動態と観光資源の分布パターンとの関連性、並びにアンケート調査を通じた観光客の利用実態の評価を通じて、観光資源の多様性、交通の利便性、宿泊施設の収容性、開発の余地性の観点から淡路島の観光開発ポテンシャルを総合的に評価する手法の開発を試み、観光開発ポテンシャルから見た今後の淡路島の観光開発の課題と方向性を探究することを目的とした。

第2章 観光資源の分布パターンと観光動態との関連性

本章では、淡路島の1市10町を対象に、観光資源の分布パターンと観光動態との関連性について分析し淡路島の観光特性を明らかにするとともに観光開発ポテンシャルを評価するための指標として観光資源の多様性の重要性を明らかにした。

解析結果を見ると、昭和30年時点での観光資源は洲本市と南淡町に集積し、自然環境や歴史環境を背景とした観賞型、行楽型資源が重きを占めている。観光動態を見ると洲本市が大幅な伸び型、南淡町が若干の伸び型を示し、観光資源の集積が入り込み数の伸びに大きく寄与していることを明らかにした。中でも、南淡町は観賞目的の入り込み数だけが大幅に伸びているのに対し、洲本市は観賞型、行楽型ともに伸びていることが明らかとなったが、行楽型の観光がまだ低調な年代であったと判断された。昭和40年時点では、観光資源が洲本市と南淡町へ集積する構造に変化はないものの、洲本市の複合観光地化が進んだことが明らかとなり、洲本市における複合観光地化が入り込み数の伸びに大きく影響したものと判断できる。昭和50年時点になると、洲本市に加え他の地域での新たな施設立地が活性化し洲本市への一極集中型の構造が崩壊しつつあることを明らかにした。この構造的変化が洲本市への入り込み数の低下傾向に影響したものと理解できる。また、この年代では教育型施設が観光資源の一形態として確立するものの、観光動態には大きく影響していないものと判断される。さらに、津名町や南淡町では巨大イベントが観光動態に大きく寄与することが明らかとなったが、これは短期的な影響に留まるものと考えられる。昭和60年時点では、淡路島の観光拠点の多極化が進行していることを明らかにした。このような中で、洲本市では新たな施設整備がなく、このことが入り込み数の急激な低下に強く影響したことや、南淡町や西淡町も洲本市と同じ傾向を示すことが明らかとなった。一方、淡路町と北淡町、一宮町、東浦町の4町では、徐々に複合観光地化が進行し入り込み数を伸ばす傾向を示すことが明らかとなった。また、津名町や三原町のように特化型の行楽型施設の整備は、入り込み数を大きく伸ばすことを明らかにした。また、昭和50年時点では観光形態として確立されていなかった教育型観光が観光の重要な一形態として確立することを明らかにした。

以上の解析結果から観光資源の分布パターンと観光動態との関連性を見ると、各年代の観光資源の集積が入り込み数の伸びに強く影響することを明らかにした。特に、昭和50年代以降、価値観の多様化、自動車社会の進展などを背景として複合観光地化が進展し、それが入り込み数の伸びに大きく影響することが明らかとなり、観光資源の多様性が重要な指標となることを明らかにした。一方、巨大イベントの影響や施設の老朽化、特定施設の整備の影響などが観光動態に影響することも明らかとなり、地域レベルの解析に加え地点や施設レベルの解析といった課題が残されているものと考えられる。

第3章 観光客の利用実態から捉えた淡路島の観光特性

本章では、淡路島の観光客に対するアンケート調査を通じて得たデータを用いて、観光行動パターンの特性、宿泊施設の利用特性、観光地域としての魅力性の評価特性を解析し、淡路島の観光特性を明らかにするとともに、観光開発ポテンシャルを評価するための指

標を探った。

観光行動パターンの特徴では、まず、淡路島の観光形態は宿泊型観光が中心であることを明らかにした。その観光目的は行楽型と健康型が優先されることと多様な観光施設を持つ複合観光地化が進んでいる洲本市と南淡町に多数の観光客が来訪していることが明らかとなり、地域内の観光資源の多様性が入り込み数に大きく影響すること

80%を占め、淡路島の観光は近傍都市に依存していることが明らかとなった。また、淡路島観光の交通手段は自動車によるものが8割近くを占め、自動車利用を前提とした交通の利便性が今後重要な指標となるものと考えられる。さらに一回の観光で1地点が最も多いものの2~3ヶ所の割合も高く平均2.6ヶ所の観光施設が利用されている点と、2~3ヶ所利用するケースの観光目的はともに健康型と行楽型のセット型であることを明らかにした。

宿泊施設の利用特性では、まず、選択理由は経済的要因や施設レベルの問題を除くと交通の利便性や宿泊施設の収容性が重要な指標であることを明らかにした。また、宿泊施設の集積している洲本市と南淡町に利用者の集中が見られ、宿泊施設の収容性が重要な指標であることを裏付けている。魅力性の評価特性では、淡路島全体の観光の魅力性は、自然環境に依存する傾向が強いことが明らかとなり、自然環境の保全を前提とした観光開発のあり方を探ることの重要性が示唆された。また、再利用希望では淡路島観光への期待の大きさが伺えた。

以上の解析結果から、自動車利用を前提とした近傍都市からの交通の利便性が最も重要な指標であり、宿泊型観光を前提とした宿泊施設そのものの魅力性と収容性が重要な指標であることを明らかにした。また、周遊型観光を背景とした複合観光地化への指向が明らかとなり観光資源の多様性は重要な指標になるものと考えられる。さらに、自然環境が淡路島観光のベースである点や自動車利用が前提となる点を考えあわせると観光開発適地の選択が重要な課題であると考えられる。一方、観光動態そのものについては観光地域側の問題に加えて利用者側の経済的要因も重要な視点であることが明らかとなった。

第4章 観光開発ポテンシャルの総合評価と今後の課題

本章では、既往研究からの成果に加えて第2章、第3章の考察結果から、「観光資源の多様性」、「交通の利便性」、「観光客の収容性」、「観光開発のための未利用地の存在量」の4指標から、観光開発ポテンシャルの総合的な評価手法の提案を試みるとともに、ポテンシャル評価から捉えられる今後の淡路島の観光開発の課題を探った。

4指標の定量化は1市10町を解析単位として行うものとし、観光資源の多様性では資源の類型化別（観賞型、健康型、教育型、行楽型）の出現箇所数を基礎データとして、以下に示すSimpsonの多様度指数を用いて定量化するものとした。

$$1 / \sum p_i^2 = 1 / \sum p_i^2$$

(p_i : 各タイプの相対優占度=各タイプの箇所数/総箇所数、 $1 / \sum p_i^2$: 多様度指数)

なお、多様度指数が高いほど観光資源の多様性が高いことを示すが、本論では多様度指数を3ランクに分類して1市10町の相対的な評価を捉えるものとした。

交通の利便性は次式によって定量化した。

$$A_i = \sum \{d_{ij} \times (k_j / L)\} / n$$

(A_i = 各市町の交通の利便性、 d_{ij} = 各市町*i*と近隣都市*j*との最短時間距離、 k_j = 近隣都市*j*の人口、 L = 各近隣都市の人口総数、 n = 各近隣都市の数)

なお、式より得た平均最短時間距離を4ランクに分類して相対的な評価を捉えるものとした。

観光客の収容性は、昭和23年の旅館法によって分類される旅館、ホテル、簡易宿所、季節宿所の4分類で捉え、観光客の収容数によって定量化し、収容客数を4ランクに分類して相対的な評価を捉えるものとした。

観光開発のための未利用地の存在量は、地形傾斜、土地利用と道路条件の視点から定量化するものとし、地形傾斜では傾斜度8°~20°の台地を開発適地、土地利用では用地の確保と土地利用転換の可能性が高い林野を開発適地、道路条件では主要幹線道路の沿道300m以内の地帯を開発適地として抽出し、以上3つの開発適地の条件を全て備えている空間を面積で定量化し、3ランクで相対的な評価を捉えるものとした。さらに観光開発ポテンシャルの総合評価は各指標のランクを集計することによって求めた。

以上の4指標を用いて1市10町の観光開発ポテンシャルを捉えた結果、淡路島の唯一の市である洲本市が昭和40年代から昭和50年代にかけて飛躍的な伸びを示し、現状の観光開発ポテンシャルも依然高い水準で維持されていることが明らかとなり、今後も淡路島観光の中心として発展するものと判断される。ここでの課題は開発年代が古いことからそれらの観光資源の再生が重要な視点であることを明らかにした。昭和50年代で洲本市に次いで高いポテンシャルを保有していた北淡町と西淡町はその後も順調な伸びを示し昭和60年代ではポテンシャル評価がさらに向上していることが明らかとなった。特に、両町では観光資源の多様性が最も高いランクにあり、これは旧来の観光資源に加えて新たな資源開発が順調に進んでいることを示すものであり、これまでの発展軸上での開発が進むものと予測される。五色町と南淡町も上記の両町と同様の傾向を示すものの従来の海水浴型観光とわず潮観光に依存している部分が多く観光資源の多様性を高めることが重要な課題であることを明らかにした。一方、内陸型の三原町と緑町はポテンシャルが非常に低いことが明らかとなった。これは観光資源の多様性の低さが大きな原因であり、多様性の向上を図る新たな資源開発が重要な課題となるが、観光開発のための未利用地の存在量が低い三原町では特化型観光資源の開発とともに他地域との連携策が重要な課題であることを明らかにした。

結語

本論では、淡路島を対象に観光資源の分布パターンと観光動態との関連性、観光客の利用実態調査並びに既往研究の整理を通じて、観光資源の多様性、交通の利便性、観光客の収容性、観光開発のための未利用地の存在量の4指標から1市10町を単位とする観光開発ポテンシャルを総合的に評価する手法を提案した。この手法は、これまでの観光開発の動向から現状の観光開発ポテンシャルを評価する手法である。この評価手法はこれまでの発展軸上での観光開発の可能性と限界性を評価できるものであり、1市10町を単位とするような地域レベルでの今後の観光開発のあり方を探る有効な手法と考えられる。一方、本論でも明らかのように個々の観光資源の魅力性といったような資源レベルでの評価手法は残された重要な課題である。また、観光動態は、観光資源や観光地域といった着地側の問題とともに観光客の可処分時間や所得といった発地側の問題も大きな要因であり、これも残された重要な課題である。